

風俗から見た源氏物語繪詞

鈴木敬三

一

こゝに風俗の對象として取扱ふ徳川・益田兩家に保存される源氏物語繪詞の殘缺は、畫面の現存する十二帖十九段徳川本九帖十五段 益田本三帖四段であり、詞書だけの部分はすべて省略にしたがふことゝした。

この畫面は、人物の描寫を中心として居るが、その背景は、詞書の内容に伴つて、室内と室外、更に室外から室内にかけての三場面である。

室外 純粹なもの 一段

關屋 逢坂山から打出が濱を鳥瞰する。

室外から室内 専ら庭前から簀子・廂の一部 十段

蓬生 常陸の宮の殿の庭前から高欄付簀子・廂を僅かに示す。

柏木三段 六條院の女三の宮の殿の南面、前庭から高欄付簀子・廂の間・身舎の一部。

鈴虫一段 六條院の女三の宮の殿の庭前から簀子・廂の間と之に續く渡殿の一部。

鈴虫二段 冷泉院の御所の庭前から高欄付簀子・廂の間。

風俗から見た源氏物語繪詞

御法 二條院の前栽から高欄付簀子・廂・身舎の一部を覗く。
竹河一段 玉臺の念誦堂の東面、庭前から高欄付簀子・廂の間を覗く。
竹河二段 玉臺の殿の廊から壺を隔てゝ高欄付簀子・廂の間の一部と渡殿を示す。

橘姫 宇治の山莊の透垣から庭を隔てゝ簀子・廂の間を示す。

宿木三段 二條院の前栽から高欄付簀子・廂の間の一部。

東屋二段 三條邊の家の庭前から簀子・廂の一部。

室内 専ら身舎の一部に設けた寢所から廂にかけて 八段

柏木一段 六條院の女三の宮の寢所とした御帳臺の西面。

柏木二段 一條の柏木の殿の寢所から廂の間。

横笛 三條の夕霧の殿の寢所から廂の間。

夕霧 三條の夕霧の殿の身舎と廂の一部。

早蕨 宇治の山莊の身舎から廂の一部。

宿木一段 清凉殿朝餉の間。

宿木二段 六條院の六の君の身舎の内部。

東屋一段 二條院の中の君の寢所から廂の一部。

室外は關屋の巻の山水畫たゞ一つであり、他は全くの室内と、庭前から殿舎の一部を表現したものである。したがつて其の大部分を

占める建築の描寫には最も注意を集注したものと思しく、同様な畫面の輩出による單調さを避けるために間取の位置、調度の置き方、建物の向きを變へて異なる構想を示して居る。

此の殿舎の内部を示す描寫の特色は、建物の上長押カミノナゲシから上を全く除外して、斜め上から内部を俯瞰した所謂吹拔屋臺形式であり、これがためには俯瞰の邪魔になる藁シロミの類はすべて省略し、立體化して内部を良く覗かせるために建物は何れも四十五度近く急勾配に傾斜して書き、調度もこれに準じて鋪設して居る。

而も此の鋪設は、剥落の多い鈴虫の卷一段女三の宮御殿によれば、それらの位置に「き帳」妻戸「つまと」遣水「やりみす」前裁「原」「せさい」などの指定が見られ、先づ下當りに建築と共に鋪設の位置を定めて彩色する時の指示としたことが知られる。

斯様な背景に對して、人物は總體に大き目であるが、女子は男子より稍々小形に書き、殊に其の背面は際立つて小さくして居る。

此の顔面の描寫は、通常引目鉤鼻といはれるが、目は單なる一本の線による引目ではなく、數本の細線ではのかに腫さへ浮べて極めて沈靜な表情を示して居り、顔つきは概ね下脹れであるが、蓬生の卷の末摘花と惟光、早蕨と東屋二段の卷の辨の尼だけは、細面の横顔を見せて鼻を書き添へて居る。而も注意すべきは、此の辨の尼の顔は、早蕨の卷と東屋の卷のそれと、向きこそ異なれ、全く同一なことであり、斯様な同一の面貌は、東屋二段の乳母と早蕨の中の君、東屋一段の中の君と同畫面中の下手の侍女にも見られ、鈴虫の卷の

簀子中央に笏拍子をとる横顔と柱に背をもたす源氏の君のその如きは、既に秋山光和氏も說かれて居るが、美術研究第四百十七號所載圖版要項冠の巾子ぎはから相好、纓の垂れ方まで寸分違はぬものであり、更に簀子の左に笙を吹く横顔とも向きを變へただけで全く同一として居る。また此の冷泉院と柏木の卷三段の薫を抱く源氏の君の斜め向きの顔も向きこそ異なれ同一である。

こゝに於いて、各畫面に對し、先づ顔面を中心とする一定の人物の型を數種作つて、これを下當りの一應整つた背景の上に適當に配置し、装束や衣文を其の場にふさはしく取りまとめたものと推考されるのであり、斯様に見れば、建築、調度と顔の位置にそぐはぬ無理な姿勢橋姫の中の君や、手前よりも奥の方の人物が際立つて大きくなつて居ること柏木第三の源氏の君、橋姫の薫、東屋第一の中の君、東屋第二の乳母なども一應納得することが出来る。

唯一の山水畫である關屋の卷中の人物も山景に比して大き目であり、山中の源氏の君の牛車を特に大きく無理に山間に嵌め込んで、空に浮いた牛の下半身を霞を以て區切り、これから前驅への道筋を三重に曲折させるなど背景を人物に拘泥せずして書き上げた上に附置することの破綻を暴露して居る。

したがつて一通り配置したのちも屢々改補の跡が認められるのであり、横笛の卷の夕霧の殿の寢所の前の廂の左手の仕切りの如き、黒漆の鴨居を御簾の帽額の上から書き副へて障子を入れて居り、竹河一段の藏人の少將、橋姫の薫は、共に右端から屋内を覗くが、内

部を大きく表現して居るので、それを引立てるために冠から顔を下當りより小さく彩色して書き起して居る。これと反對に柏木^{三段}の源氏の君の冠は、古様を示すために巾子を下當りより大きく書き改めたことが剝落によつて認められ、更に東屋一段では下當りの際に寢所の前に置いた燈臺を彩色の時は塗り潰して居り、同第二段の薰が、柱ぎはまで手をついて居たのを、彩色後塗り潰して直衣の腰の格袋の線にとゞめさせて居る。向ほ此の部分は、秋山光和氏の光學的調査の結果、はまで手をのばしたのが剝落したことゝ判明した

また頭髮の生えぎはの毛描は、眉や髯を極めて細く入れて居るに比して粗く、殊に大部分は顚顚と鬢との間をあけて髪のとおり方を示して居るが、柏木^{二段}・宿木^{一段}・宿木^{上と主}の卷には此の風がなく、通常の毛描として居る。

二

色彩は、紙面の大部分を何らかの色で塗り潰した後、改めて人物・建築・調度の輪郭を再び墨で書き起し、服飾の部分は服地の色に相應した濃い色で衣文や重ねの線を示し、更に服飾・調度の各部にはそれぞれ適宜な文様を入れ、夏の人物の如きは肌を胡粉盛りとした上に薄く装束を着せかけて居る。

文様の大部分は、習地の織文・染文・摺文・描文と調度の髹漆螺鈿などの文様を表現したものであるが、此の文様の中、殆んど各段に共通して畫かれて居るのは御簾の帽額の青地黒による窠に臥蝶文

と、縁の窠の遠文であり、而も其の描法を通覽すると巧稚精粗極めて區々で、此の彩色に多數の畫人の參加を明示して居る。

冬の几帳の通常の文様である朽木形も、本繪詞のそれは蘇枋染を示す茶一色でなく、先端に縁又は紺を加へてほかし、榮花物語わかみづの卷に「くちきがたのあをむらさきににほへる」とあるを明示し、朽木の表皮の腐蝕状態を文様化したことによる原始形を窺はさせるが、其の色のさし具合も段によつて異なり、且つほかさずに色を加へたものも存して居る。

柏木一段 女三の宮出家 白地に黒茶の端を縁

柏木二段 柏木と夕霧 白地に濃く白の襷を入れ、縁の端を紺

柏木三段 五十日の祝 同 右

竹河一段 薰の玉鬘訪問 白地に茶の端を縁

竹河二段 藏人少將の隙見 同 右

早蕨 宇治の中の君と辨の尼 白地に總體に淡く茶に端を縁

宿木一段 徒然の圍碁 白地に紺の端を縁でほかさずに入れる

斯様な朽木形の各種が、當時實在したのかも知れないが、其の表現の方法は、或は太く、或は細く、巧稚様々な描法を示して、筆者の相違を推測させる（圖版第一〇、Aの3）。

また疊の高麗端の大文も、白綾に黒く四葉を織り出した光澤を表現して、銀地に黒く文を出して居るが、これまた精粗區々であり、東屋一段の卷の如きは四葉に點線による菱襷さへ入れて居る。後世の襷に四葉文様は大臣以下公卿所用の小文高麗であるが、これは他の大文に變らぬ大きさに襷を加へたもので、殊に畫面が匂の宮の二

條院の殿舎故、小文でないことは明かであり、筆者の意見によつて別種の大文を畫いたのであらう。併し、同じ二條院でも、御法や宿木三段はたゞの四葉の大文であり、殊に宿木のそれは描法最も拙劣である(圖版第一〇、Aの4)。

なほ斯様な描寫の精粗は、服飾の上にも多く認められるが、これは専ら有識故實の知識の深淺に關係して居る。

三

服装は高貴の男女の日常の姿故、大部分は直衣と袴の姿であり、其の服装類別は關屋の卷を除いて下の通りである。

計	男					女				
	直衣	狩衣	大袴	和	法衣	袴	細長	單袴	女房装束	唐衣表著裳
蓬生	源氏(夏、烏帽子)	惟光				末摘花			侍女四人	侍女五人
柏木一段	源氏(冬、烏帽子)				朱雀院	女三宮				
柏木二段	夕霧(冬、冠)			柏木(烏帽子)					侍女二人	侍女三人
柏木三段	源氏(冬、冠)									
横笛			夕霧(烏帽子)			雲井雁乳母				
鈴虫一段	冷泉院(夏、御引直衣)					近侍尼(付袈裟)	女三宮			
鈴虫二段	源氏と螢(夏、冠)							雲井雁		侍女一人
夕霧	夕霧以下三人(夏、直衣布袴)					侍女一人				
御法	源氏(夏、烏帽子)					紫上				
竹河一段	薰(冬、冠)					明石中宮				
竹河二段	藏人少將(冬、冠)					宰相君以下六人				
橋姫	薰(夏、冠)					中君	大君			侍女二人
早蕨						藤侍從等二人				
宿木一段	薰(冬、冠)			主上(冠)		中君			侍女二人	
宿木二段			句宮(烏帽子)			辨尼(付袈裟)	六君		侍女五人	
宿木三段	句宮(夏、烏帽子、打掛)					中君				
東屋一段						浮舟				侍女二人
東屋二段	薰(夏、烏帽子)					右近達二人				
計	十八人	一人	二人	二人	一人	三十六人	三人	一人	十三人	十三人

登場人物は、源氏の君の抱く五十日の薫^{柏木三段}・雲井の雁の抱く嬰兒横笛を省いて、男子二十四人、女子六十六人、總計九十人であり、女子の多いのは物語の本文自體が専ら女子の世界を扱つて居るためである。

關屋の卷は、人物が小さいのと剝落のため服裝の明瞭でないものもあるが、

常陸介の一行

牛車^{八葉} 女車^{八葉} 牛飼童^{剝落} 召具^{立烏帽子} 狩衣^{六人} 牛車^{八葉} 女車^{八葉} 常陸介^{馬上、立烏帽子} 額^{額狩衣、弓矢}
供奉^{援烏帽子} 狩衣^{二人} 警固武者^{馬上、援烏帽子、水干、行騰、弓矢} 郎從^{直垂} 小荷駄馬^{三頭}
下人^{簑笠姿} 一人

源氏の君の行列

前驅^{馬上、立烏帽子} 狩衣^{二人} 召具^{立烏帽子} 狩衣^{一人(上下剝落)} 牛車^{八葉} 隨身^{馬上、立烏帽子} 狩衣^{一人} 弓矢^{一人}
下部^{平禮白} 傘持^{白張} 張^{二人} 傘持^{一人}

狩衣十三人、白張三人、水干一人、直垂一人、其他^{剝落不明一人、簑笠姿一人}、計二十人であり、他の段に見られぬ地下の官人、牛車、馬具が畫かれて居る。そこで此の卷は他の十八段とは別に取扱ふ方が便宜である。

以上の個々の服飾に關しては、源氏物語繪詞の風俗^{美術研究第一五五號、國華第七四二、七四三・七四四、七四五號所載}の中に一應考察を加へて置いた故、こゝには描寫の上最も特色をもつ直衣を中心として攻究して見たい。

1 直衣

直衣は、褌の服裝であり、雜袍の呼稱がある様に、束帶・衣冠の

風俗から見た源氏物語繪詞

袍の特色である當色とは異なる自由な色によるを本義とするのであるが、三位以上及び大臣の子孫は聽許を経て參内するを得たため、色目の上にも一應の制約が存したのである。

即ち、冬は、表を主上の御料に倣つて白とし、裏を二藍とするが、二藍は紅に染めた上を更に藍で染めたもの故、著用者の年齢によつて紅と藍の深淺の度を異にし、若年程紅を深くして蘇枋に近くし、壯年となるに隨ひ紅を淡く藍のみとして縹とし、年と共に藍を淡く、宿徳以後は白としたのである。したがつて若年は紅梅重ね、櫻重ねであり、壯年から卯の花重ね、柳重ねとなり、遂に表裏共色の白重ねとなるを常とした。

なほ夏の料は一重故に、此の裏の色の使用を原則としたのである、冬は十月一日から三月晦日までとし、他は夏で、初夏晩秋は下著の重ねによつて寒暖を調節したのである。

玆に於いて、畫面の季節、人物の老若は、直衣の色によつて明瞭に識別されるのであり、蓬生・鈴虫二段・夕霧・御法・橋姫・宿木三段・東屋二段の十二人は夏姿、柏木一段・柏木二段・柏木三段・竹河一段・竹河二段・宿木一段の六人は冬の姿である。

また夏冬を通じて、式正の晴の時は冠直衣とし、略時には烏帽子直衣とする故、蓬生・柏木一段・御法・宿木三段・東屋二段の五人は烏帽子直衣であり、柏木一段・柏木二段・鈴虫二段・夕霧・竹河一段・竹河二段・橋姫・宿木一段の十三人は冠直衣である。

此の季節は本文の指定に基くものであるが、烏帽子と冠の相違は

本文の情況判斷による筆者の任意の表現である。そこで此の點でも筆者の本文の内容の咀嚼程度が知られるのであり、烏帽子直衣は忍びの出行東屋二段蓬生と自邸内の有様柏木一段御故、法宿木三段概ね妥當である。ただ柏木一段の源氏の君は内々とはいへ朱雀院の御幸故、冠直衣に改めても宜いのであるが、もとより改つた儀でもないで此のまゝでも差支へないばかりでなく、此の方が却つてさし迫つた悲壯味をただよはせて居り、而も烏帽子のマネギの剝落などから見れば冠を畫き直した形跡すら窺はれる。

冠直衣の院參鈴虫二段・參内宿木一段・祝儀柏木二段は當然であり、夕霧・竹河二段は何れでも差し支へないが、竹河は共に心惹かれる姫君の許に參向するための用意らしく、夕霧も自第とはいへ歸邸早々暑さのため直衣を脱いではおつたまゝの姿を窺はさせる。然るに橘姫は不可解である。服裝も本文には狩衣とあり、長途宇治の山莊への出行故、烏帽子狩衣が當然である。宇治の宮への改つた姿としては本文中に屋内に入つてから著替へるための直衣の用意さへ別に示して居る。したがつて此の段の冠は不適當であり、臆測すれば構圖上、或は竹河一段の藏人の少將の姿を援用したのではなからうか、何れにせよ此の段は總體に後補が多く他と異なつて居る。

季節は、先づ指定通りであるが、宿木一段だけは本文に「御前の菊うつろひ果てゝ盛なる頃」として秋の末を示して居るに對し、冬の直衣を著せて居り、此の段もまた注意すべき箇所が多い。

冬の直衣は、源氏の君の宿徳としての白の直衣柏木一段、柏木三段、夕霧柏木二段。

藏人少將竹河一段・薰竹河二段宿木一段の若年による櫻重ねの直衣を明瞭に畫き分けて居る。たゞ藏人の少將と宿木一段の薰は、紙端の關係上、少々剝落して文様などにかすれを見せて居るが、夕霧と竹河二段の薰は精密に其の倂をとめて居る。即ち、下地を淡赤くして、上に白をかけたばかりによる櫻の重ねを見せ、而も首上と鰭袖の部分は下地に赤を入れずに白のまゝとし、直衣の此の部分が表地の折返しによつて裏地を透かさぬことを表現して居る。

源氏の君は柏木一段、柏木三段四十の御賀を遙か前にすごさせられた湖月抄諸卷年立によれば源氏時に四十八歳ことに於いて表裏白の直衣であることを明示して居るが、此の白の部分には往々淡紫色が交つて居るので誤解され易い。併しこれは白を厚くかけて直衣の衣文や襷を濃く入れたのが變色したのであり、此の描方は几帳の白の帷などにも同様に認められる。

直衣の文様は、白の地文故、銀で所謂浮線綾の丸文を入れて居るが、これは中央の唐花を大きくして、瓣の外輪の四方に小さな割唐花ワリカラを嵌めたものである(圖版第一〇、Aの1a)。而して斯様な大形の唐花による浮線綾は本繪詞の特徴であり、信貴山縁起繪・伴大納言繪などの直衣は何れも夏の料故、對比すべくもないので、稍々下つた紫式部日記繪のそれを見ると、中央の唐花は極めて小さくなり、瓣の四隅から外方に長く藥を出し、此の間に重瓣付きの割唐花を嵌めて丸文として居る。而して後世は何れも此の風に倣つて居り、此の外輪の重瓣が中央からそれぞれ内側に深く反らされる様になつた結果、蝶の揚羽を聯想して臥蝶文様と附會する様になり、遂には純粹

の臥蝶文を交へたものさへ生じ、浮線綾の上の音のフセは臥蝶のフセを通はせたものとして、此の文様による綾だけを浮線綾と呼んだとさへ解釋するに至つた。併し其の原形である本繪詞のそれは紛れもない唐花の丸であり、却つて源氏物語の野分の巻に「御なをし、直衣唐花文綾からのけもんれう」とあるを窺はさせる。村上天皇御記（續々群書類從五記録所引）天徳四年三月卅日條に和歌洲濱の臺覆いに「繡花柳鳥、花文綾覆」として此の種の帯地の使用が見える

夏の直衣姿は、源氏の君蓬生・鈴虫二段・御法・螢兵部卿鈴虫二段・橋姫東屋二段の尋常の著装と、冷泉院の御引直衣鈴虫二段・夕霧以下三人の直衣布袴鈴虫二段・夕霧夕霧、匂の宮宿木二段の打掛姿が見られるが、是等は著装上の相違で直衣自體には何等の變りはない（圖版第一〇、B）。

併し、此の直衣の表現に於いて三種の描法が認められる。即ち、
一、羅の縹の三重襷文様を明確に表示するために、下著の衣の白の光澤を表現した銀の部分は文様だけを上に濃く藍で畫いて下著の透しを示し、衣のはづれは淡藍を入れて文様を畫く。なほ直衣布袴の様に下著の銀でない場合は、上に淡藍をひいて更に文様を上に濃く畫く。

二、下著の銀の部分も、其のはづれも總體に淡藍をひいたのち、濃く上に文様を畫く。

三、下著の色を入れず、直ちに藍をひいた上に濃く文様を畫く。

右の通りであり、一は鈴虫二段・夕霧・御法であり、蓬生は全く剝落して詳かでないが、藍は剝落することがない故、一か二の手法であらう。二は橋姫・宿木三段であり、三は東屋二段である。

文様は剝落が多く、蓬生・夕霧・東屋など明確を缺くが、明瞭な鈴虫二段・御法は三重襷に花菱であり、これに對し僅かに残る橋姫

には三重襷に角菱が見え、更に白河文庫舊藏模本によれば東屋の巻も同様の角菱として、其の異なるを示して居る。

三重襷に角菱は、信貴山縁起繪を始めとする各繪卷、及び近世の遺品にも見られる恒例文様であるが、三重襷内の花菱は、阿字義傳繪に見られる他は本繪詞だけであり、而も此の文様は、直衣だけでなく、美麗几帳にも用ひられて居る。

斯様に夏の直衣にも文様の上に二様式が見られるが、著装に於いても、御法の巻の源氏の君は束帶の袍の様に格袋を内にして上から帶をしめ、橋姫の巻の薫は格袋の下に萌葱の當腰を見せて居る。後者は四天王寺所藏扇面古寫經下繪の中に同様萌葱の當腰をして琵琶を弾く背面姿が見られるが、本繪詞には此の圖だけで他は尋常の通りである（圖版第一〇、B）。

したがつて、帶を現はさぬ通常様式と、格袋を内にして上に帶をしめたのと、外に出した格袋から下の帶を透したものと三種が認められる。

指貫は、下半身の隠れて居るもの竹河一段、柏木一段、鈴虫二段の四人の他は、剝落や蓬生、群青による紺地竹河二段、橋姫、關屋、二藍夕霧、白一段、東屋二段が見られ、紺地、二藍には文様を缺くが、白は白地に地文を示すために厚く白を重ねて塗つたものが、濃い白の變色によつて文の部分が明瞭になり、鈴虫二段の源氏の君は花輪違、宿木二段と東屋二段の薫は唐花の丸を出して居る。此の唐花の丸は、直衣のそれとは中央唐花外輪の割唐花を内に向けて居ることに於いて相違して居る（圖版

ものであることは疑ふべくもない。而して其の中の主要な畫人が最初の構圖配置や書き起しの仕上げに携つたものと推測されるが、此の中心人物が一人でなかつたことは、各段の配置や人物・調度に見られる有識故實の知識の深淺、描寫の精粗、物語の本文に對する咀嚼程度の相違によつて察知される。

故實・描寫ともに良好なのは鈴虫・御法・柏木であり、物語の内容に忠實なのは横笛・夕霧・竹河である。概して粗雑なのは宿木・東屋であり、橋姫は任意に仕上げて屢々改補した痕跡を残して居る。これ等の諸點に關しては別稿源氏物語繪詞の風俗の各段を參看されたい。益田本は美術研究第一五五號所載 徳川本は國華第七四二・七四三・七四五號所載

斯様にして今まで縷述したことを總括して遺品を通觀すると

- | | | | |
|----|---|----|-------|
| 一群 | 1 | 蓬生 | 關屋 |
| | 2 | 柏木 | 横笛 鈴虫 |
| 二群 | 3 | 夕霧 | 御法 |
| | 4 | 竹河 | |
| | 5 | 橋姫 | 早蕨 宿木 |
| 三群 | 6 | 東屋 | |

右の三群に大別されるが、描寫の異同から更に細分すると下の六群となり、これに遺存の詞書を併せて源氏物語の全卷に配分して其の大體の配當を推測すると、當初は恐らく十卷より成つたものであらう。明月記天福元年三月廿日條や古今著聞集卷十一畫圖に見える源氏繪十卷は天福元年の作とある故、もとより本繪詞より作期が下ると共に其の關係の有無は知るべくもないが、これによつて源氏物語を十卷に分けて繪詞に仕立てることが當時行はれて居たことが知られる

而して現存の各段は、概ね此の三群にそれぞれ中心となる畫人が

居て、各々門人を率ゐて擔當したものと思はれる。

却説、此の製作期であるが、本繪詞に見える冠、直衣の形狀は、京都の宇治上神社本殿第三の殿の兩扉内側に畫かれた隨身の冠、束帶の袍に比して、一段と遅れて居ることに於いて注意される。美術研究第四百四十九號所載秋山光和氏「宇治上神社本殿屏繪」

此の屏畫は、外に押開いて左右から内陣を中心に向ひ合はす様になつて居り、隨身の習ひとして向つて右は赤の袍、左は緑の袍を着て居る。

共に著るしく剝落して居るが代表的な柔裝束であり、尙ほ巾子型を入れたかと思はせる程大形の巾子をつけた冠、構成上直衣と束帶の相違はあるが、袍として同じ仕立をして居る首上の部分も、源氏物語繪に見える直衣の首上の特徴である高首上と同様の高さで且つ頤下に源氏の様な刎りを入れぬ古樣さを示して居る。

赤は五位、緑は六位の當色であり、共に海松丸縫の紺地の平緒を垂れて居ることより見れば、剝落して居るが太刀を帯びて居たことは明瞭であり、而も綠袍には前裾の兩脇から白袴が見え、欄が認められぬことからしても闕腋であることが知られる故、これが近衛の武官であることが察せられる。

また赤袍は、袖付から身の部分が形良く剝落して居り、恐らく半臂をつけたことを示して盛り上げた畫具と共に上の赤の色が落ちたのであらう。さすれば是は夏の束帶姿である。

斯様に武官にして赤の袍を着けたものとしては先づ警固の一員で

ある近衛の將監が聯想される。將監は從六位上相當であるが、五位に進んで左近大夫、右近大夫などとも呼ばれ、源氏の篝火の巻にも「御ともなる右近大夫をめして」とも見えて居る。

緑の袍は常の近衛の將曹であらうが、此の袍の色が緑であることは極めて注意される。

地下の當色は延喜彈正臺式に「凡六位七位朝服同著深緑、八位初位共服深縹」と規定されて居るが、同彈正臺式に「凡縹色以藍指者、衛府舍人の所謂縹ではない。七位以下は名目だけで實際に叙せられるものは稀である。故注意を要する。」等儀服、他人不得轉用」とある藍指は藍染

つたゝめ、地下は六位の緑一色となり、緑衫とも呼ばれ、其の色は寛治時範記御殿行幸服 飾部類所引に「外記二人三華雅仲、惟宗仲信○中略○とあるによ

つて知られるが、六位の藏人は御料の麴塵の御袍を賜つて青色と稱して使用し、青色は山鳩色とも呼ぶ様に經綠緯黃による織色故、常の六位の緑の袍は、是より黄色が淡いので淺黃の袍とも呼んだのであり、源氏の少女の巻に六位の夕霧が

くれなるの涙にふかき袖の色をあさみどりといひしをるへき

はづかし」と雲井の雁に歌ひかけ、「淺黃の心やましければ内裏へ參り給ふこともせず」とあるのも此の色による表現である。

然るに次第に淺黃を淺葱と解して縹色と見る様になり、稍々後の例ではあるが百鍊抄後深草天皇正嘉二年十一月四日條には「淺黃奴袴色非濃、聊有花色」と

見え、飾抄の編者中院道方も親王著御の淺黃を「先年六條宮元服之時、袍色有御沙汰、薄女郎花色也、有黃氣者」として居り、高倉永行の裝束雜事抄應永六年四月の奥書ありに「綠衫平絹を紺に染たる物也」とする

様になつた。而も斯様な解釋は相當早くから行はれて居たらしく、淺黃の内容が混亂したことは既に飾抄所引保延五或秘記曰として

後白河 雅仁親王元服、諸卿等相談曰、無品親王著黃衣、或曰謂之淺黃、專不分明、

とあるにても知られ、更に寛治元六二御曆を引いて「綠御袍淺黃也」として居り、藤原兼實も玉葉建久二年十二月十四日條に「爲不令迷後代之人、聊

錄子細」として「無疑以綠稱淺黃也」と斷じて居る。

されば信貴山緣起繪中卷 延喜加持の勅使の六位藏人は、下襲・表袴に禁色を著用しながらも、袍には藍の具による縹の闕腋の袍を著けて居る。

是に對して宇治上神社本殿第三の殿の左扉の隨身が綠青による緑の闕腋の袍を著けて居ることは、混亂以前の情況を示すものとして注目される。

而も此の扉畫が、御創建當時のまゝのものと認められて居ることに於いて、此の神社の建立は、福山敏男工學博士の示教によれば、其の墓股の形狀などよりして、平等院鳳凰堂より新しく、中尊寺金色堂より古いことは明瞭であるとされて居る。さすれば鳳凰堂落慶は天喜元年であり、金色堂は天治元年故、此の七十一年の間に宇治上神社が造營されたに相違ないが、此の扉畫の闕腋の風は造營の下限である天治元年よりは幾分遡るものと思はれる。

したがつて源氏物語繪詞は、此の扉畫より以後の形式に屬する故、天治頃か或はそれ以後と考へることが出来るであらう。

柏木一段に見える女三の宮の御帳臺濱床正面の格狹間の如き、其

A 文様描寫の特色

1. 唐花丸

B 直衣着用の特例

a 直衣（竹河一）

c 桂（東屋一）

b 指貫（東屋二）

2. 單の表裏（宿木二）

b 裏の沈文

a 表の浮文

3. 朽木形

a 竹河一

c 宿木一

b 早蕨

4. 疊の縁

a 鈴虫二

b 東屋一

- 上
a 冷泉院（鈴虫二）

中
b 源氏（御法）

下
c 薫（橋姫）

の極めて大形の割り方は、中尊寺金色堂須彌壇の銅張りの格狭間に類似して居る。また其の著装法に於いて御法の巻の源氏の君の直衣の如き、藤原兼實の頃、全く知られぬ所謂ベタ付ケの著装をして居ることから見て、兼實は保元三年十歳で既に正五位下に任官して居る故、それより以前に相違ない。

而も久能寺什物法華經殘缺藥草喻品の見返繪に對比すると、見返繪は銀砂子地に金箔禾を散した上に、冬の冠直衣姿の公達が、萌葱の狩衣に立烏帽子姿の従者をして唐傘を身近にさしかかせ、しとど降る雨を避けながら池の畔を進む有様であり、此の光景は徳川本源氏物語繪の末摘花の源氏と惟光に類似して居るが、此の服飾に於いて、見返繪の兩人の下半身が土坡で隠れ、殊に公達の後頭部の破損が甚しいために詳細に比較出来ないが、見返繪の従者の狩衣から見ると總體に古様ではあるが、源氏繪の惟光の狩衣より首上なども低くなつて新様さを増して居る。

したがつて此の藥草喻品の奥書の右兵衛尉資經は明瞭でないが、同類の久能寺經殘缺及び久能寺什物法華經廿八品目錄朝吹文書に見える名稱からして、此の經の成立が永治元年と認められて居ることからすれば、源氏物語繪詞は永治の頃より尙ほ古い服飾様式を畫いて居ることが知られる。

こゝに於いて源師時の長秋記元永二年十一月廿七日條に

璋子

參中宮御方、以中將君被仰云、源氏繪間紙可調進、申承由、又上皇仰云、

白河院

畫圖可進者、同申承由、

とある記事が注目される。もとより右の記事だけでは此の源氏繪が調成されたか否かも明かでない上、天治元年より五年以前であり、遺品との關係は説くべくもないが、風俗上の時代の上限にあつては此の頃と推定して大過ないものと思はれる(昭和二十六年三月稿、昭和二十九年三月補訂)。

本稿は風俗から見た初期繪卷物研究の一部であり、本調査に際しては東京文化財研究所の諸賢、殊に秋山光和氏の御好意によるところが多い。明記して謝意を表する次第である。